
〈研究ノート〉

中世スコットランドのダル・リアダ王国

—— ダル・リアダ王国の伝説と最盛期から衰退までの変遷 ——

The Kingdom of Dal Riada in the Medieval Scotland

—— Its Legend, Golden age and Decline ——

久保田 義 弘

要旨と目次

本稿で取りあげる北部アイルランドとスコットランド北西部で活動したダル・リアダ王国は、6世紀の初めに建国し、アイダーン王（Áedán mac Gabráin）（在位 574 年？-608 年）の支配下のときに、その周辺国との戦いによる勝利によって、その領土を発展・拡充し、その最盛期に至した。しかし、603 年頃の Degsastan の戦いにおいて、その王はノーザンブリア王国のエゼルフリス王（AETHelfrith）（在位 593 年-616 年）に敗れ、その後、彼の勢力は衰え、同時にダル・リアダ王国の力も衰えた。さらに、彼の後継者は、周辺国との戦いに敗北するのみならず、内部抗争（ケネル・ガブラーン家とケネル・コンガル家の王家の抗争）を繰り返し、その勢力は一層衰退した。また、637 年の Mag Rath（ダウン州の Moira）の戦いの後、北アイルランドのダル・リアダ王国は滅ぼされ、同時に、スコットランドのダル・リアダ王国はその政情も不安定化し、ノーザンブリア王国に従属し、さらに、685 年にノーザンブリア王国がピクト王国の王ブリィディ（ブルード）3 世（在位 671 年-693 年）に敗北し、730 年頃にはその王国は、オエンガス 1 世のピクト王国の支配下に入り（従属し）、その王国の上王（大君子権）がピクト王に支配に入った。最後に、ピクトとダル・リアダの融和に果たしたキリスト教の役割を調べる。

第 1 節では、伝説のダル・リアダ王国と実在のダル・リアダ王国について、伝説のファーガス・モーによるダル・リアダ王国の建国とケネル・ガブラーンとケネル・コンガルそして、アイダーン王の全盛期その後のその勢力の陰りとその衰退、第 2 節では、ダル・リアダ王国の内部抗争とノーザンブリアおよびピクト王国への従属を概観し、第 3 節ではダル・リアダ王国とキリスト教の関係を説明する。

（キーワード：ダル・リアダ王国、アイダーン王、Degsastan の戦い、Mag Rath の戦い、アイオナ修道院、ウィットビーの宗教会議）

はじめに

本稿では、北部アイルランドとスコットランド北西部で活動したダル・リアダ王国の伝説上の始まりからその発展、最盛期・凋落・衰退、そして滅亡について考察する。その始まりは、6世紀の初めで、アイダーン王のその周辺国との戦いとその勝利によってその領土を発展・拡充して、その最盛期に至り、603年頃の Degsastan の戦いにおいて、その王はノーザンプリア王国のアシルフリス王に敗れ、その後、彼の勢力とダル・リアダ王国の力は衰え、さらに、彼の後継者は、周辺国との戦いに敗北するのみならず、ケネル・ガブラーン家とケネル・コンガル家の王家の内部抗争を繰り返す、その勢力は一層衰退したことを説明する。637年の Mag Rath (ダウン州の Moira) の戦い後、北アイルランドのダル・リアダ王国は滅ぼされ、同時に、スコットランドのダル・リアダ王国はその政情も不安定化し、ノーザンプリア王国に従属し、さらに685年にノーザンプリア王国がピクト王国の王ブリィディ(ブルード)3世に敗北すると、730年頃にはその王国は、オエンガス1世のピクト王国の支配下に入り、その王国の大君子権は、ピクト王の支配に入ったことを説明する。最後に、ピクトとダル・リアダの融和に果たしたキリスト教の役割を調べる。

第1節 伝説のダル・リアダ王国

1.1 伝説のファーガス・モーによるダル・リアダ王国の建国

この王国は、アイルランド北部のアルスター (Ulster)¹ (現在のアントリム (Antrim) 州) に建国されたアイルランドのダル・リアダ王国 (Kingdom of Dál Riata) と、スコットランドの西海岸 (キンタイヤ、ビュート、アーガイルなど) を活動の中心とするスコットランドのダル・リアダ王国からなっていた。この2つが1つの王国を形成していたのか、あるいは、一方が他方を征服して形成されたのか、どうかは定かではない。伝統的には、5世紀の末から6世紀の初めにかけて、スコットランドのダル・リアダ王国は、アイルランドのアントリウムがスコットランドに侵攻した征服王国²であったと理解されていた。その根拠は、古アイルランド語がスコットランドに移入されたという考えに基づいていた。その伝統的な見解に

¹ ウルスターは、当時、ウルズ (Ulaid) と言われていた。ここでは、ダル・リアダ王国、ダル・フィアタツハ (Dál·Fiatach) 王国、ダル・ナリゼ (Dál·nAraide) 王国の3王国が覇権を争っていた。ウルズ (Ulaid) は、隣国のアーギアラ (Airgfalla) 王国とイー・ニエル (Uí Néill) 王国に攻められていたため、その国情は不安定であった。

² しかし、この王国がアイルランドから来た征服王国であったという確証はない。逆に、スコットランドからアイルランドに侵攻した王国であったという可能性も否定できない。それでもスコットランドのダル・リアダ王国とアントリム州のダル・リアダ王国では類似したゲール語 (Pゲール語とQゲール語の違いはあったが) を使用されていた。このとはアイルランドのダル・リアダ王国とスコットランドのダル・リア

よると、このアイルランドのダル・リアダ王国がスコットランドに侵攻した頃、すなわち5世紀末から6世紀初め頃、スコットランドには、この王国の他に、有力な部族としてのピクト人 (the Picts) が幾つかの部族王国³ を建国していた。その侵攻は、その両王国間での抗争をもたらした。そのゲール系スコット人⁴ のダル・リアダ王国は、スコットランド人のルーツであったと理解されてきた。伝説⁵ によると、6世紀の初めごろファーガス・モー・マック・エルク (Fergus Mór mac Eirc) (501年ごろ没?)⁶ は、2人の弟⁷ (あるいは親戚) と共に

ダ王国の間には何らかの縁類関係があったと推測させる。

『Duan Albanach』では、ファーガス・モー、ローン (Loarn)、オーガス (Óengus) の3兄弟がAlba (スコットランド) を征服したと伝えている。またベータは、アイルランドの物語に根ざして、Cairpre Riata 王国とその3人兄弟の名前 (Síl Conairi, Conaire Mór, Conaire Cóm) を伝えている。

³ 『Duan Albanach』によると、ピクト人の土地には7つの王国があったと言われている。それは、ケート (Cait; 現在のケイネスやサザーランド)、ケ (Ce; 現在のマーやバハン)、キルキンあるいはシルシン (Circinn; 現在のアンガスやマーン)、フィブ (Fib; 現在のファイブ)、フィダハ (Fidach; ストラスサーンやメンティスと考えられるが、確かではない)、フォトラ (Fotla; 現在のアサル)、フォトリウ (Fotriu; 現在のマリーヤロス) である。その代表として、マリ湾の周辺で活動した北方ピクト人 (フォトリウ) とストラスモア周辺で活動した南方ピクト人の大きな王国 (シルシン、フィブ、フィダハ) があったと考えられる。

⁴ ローマでは、アイルランド人のことを "scotti" と呼んでいた。この意味はよく分からない。

⁵ 『Duan Albanach』による。

⁶ 501年にファーガス・モーの死の根拠は『Annals of Tigernach』による。彼は、ダル・リアダ王国の伝説上の王であったと思われる。実際に記録から確認できる5世紀のスコットランド国王は、クライド地方のケレテック王 (King Ceretic) (5世紀中頃) のみである。聖パトリックの2通の手紙で言及されているブリトン人の軍人クロティカス (Coroticus) とケレテック王が同一人物とされている。聖パトリックは、クロティカスがキリスト教徒を捕らえ奴隷として売ること批判し、そして彼を破門した。またダル・リアダ王のなかで歴史的に実在していたことが明らかにされるのは、ファーガス・オーの孫のドマンガイルトの息子コンガル (Comgall mac Domangairt) (540年頃没)、ドマンガイルトの息子ガブラーン (Gabrán mac Domangairt) (在位540年頃-560年頃) (560年頃没)、およびファーガス・モーの曾孫のガブラーンの息子アイダーン (Áedán mac Gabráin) (在位574年?-608年) である。

ドマンガイルトの息子コンガルの死について、『Annals of Ulster』には、538年、542年、545年とあり、『Annals of Tigernach』には538年とある。ドマンガイルトの息子ガブラーンの死については、『Annals of Ulster』などのアイルランド年代記から、558年から560年であろうと判断される。ガブラーンの息子アイダーンについては、ベータの『Historia ecclesiastica gentis Anglorum』、『Annals of Tigernach』、『Annals of Ulster』、『Senchus fer n-Alban』 (The History of the men of Scotland)、および聖アダムナン (Saint Adomnán) の『聖コロンバの生涯』にも記録されている。ガブラーンの息子アイダーンの母は、現在のストラスクライドとカンブリアであるアルト・カルト (Alt Clut) の王Dumnagual Henの娘であったかも知れない。彼は聖コロンバと同時代人で、聖コロンバによって王として聖別 (任命) された。聖別された最初の、ブリテンおよびアイルランドの国王であった。

⁷ 彼がファーガス・モーの弟であったかどうかは確実ではない。このことに関する記述は、『Senchus fer n-Alban』 (The History of the men of Scotland) にある。これは7世紀ごろのラテン語で書かれた記録から、10世紀に古アイルランド語で編纂されたもので、その記録内容はダル・リアダ王国の国王の系図やその王国の国勢についてである。

キンタイヤ半島に上陸し、そこを征服し支配した。一方、弟ローン(Loarn)⁸は北部および中央部アーガイルを支配し、またオーングス(Óengus)⁹はジュラ(Jura)半島やアイレイ島(Isle of Islay)を支配したと言われている。ファーガス・モーは、キンタイヤ半島のアッド川(Add River)ほとりのダナド(Dunadd)¹⁰にダル・リアダ王朝¹¹を樹立し、その初代国王になったと言われている。

この王国は、ケネル・ローン(Cenél Loairn)、ケネル・ノーンガス(Cenél nÓengus)、ケネル・ガブラーン(Cenél nGabrán)の3部族から構成される連合国であった。その国王では、ケネル・ローン(Cenél Loairn)¹²、ケネル・ガブラーン(Cenél nGabrán)の両家系からの国王(high king)輩出の記録は確認されるが、ケネル・ノーンガス(Cenél nÓengus)の王(Lord)がダル・リアダ王国の国王(king)になった記録は確認されていない。

アイルランドの年代記『Annals of Tigernach』には、“Fergus Mór mac Eircが、ダル・リアダの人々とブリテンの一部を支配・占領し、そこで死んだ”とある。この記述から、スコットランド人の祖先はアイルランドからアーガイルに侵攻してきたという理論(伝説)が生まれた。これからアイルランドからアーガイルへの征服王国の伝説が生まれたが、必ずしも信頼できない。ファーガス(Fergus)、彼の父エルク・モー・エオハズ・ムンルムール(Erc mac Eochaid Muinremuir)、そしてダル・リアダ王国のこの3項目の繋がりは、6世紀の後半に書かれ、そして現在に伝えられている。よって、その年代記の記述には必ずしも合理的

⁸ 『Senchus fer n-Alban』(The History of the men of Scotland)では、ローン(Loarn)の父をErcとしている。これから、Ercはファーガス・モーの父でもあったので、ローンはファーガスの兄弟(あるいは異母兄弟)であったと理解される。ファーガス・モーが長兄であったので、ローンを彼の弟とした。

⁹ 『Senchus fer n-Alban』(The History of the men of Scotland)によると、彼(Óengus Mór mac Eirc)をファーガスと同様にErcの父にしている。しかし、オーングスの家系から国王が出た記録はない。このことから、ÓengusとFergus Mórが兄弟であるという、その記録は作り話かも知れない。

¹⁰ ダナドはダル・リアダ王国の首都であった。そこを発掘すると、要塞の跡の他に、武器、粉ひき石および多くの宝石の製造鋳型が掘り出された。また、上等な物としては、ガラス製品やガリアからの両手付きワイン壺なども発掘された。

¹¹ ダル・リアダ王朝はアルピン王家の誕生する839年ごろまで続いたと推測される。この王朝は、現在のアーガイルとピュート州を治めたと考えられる。この王朝は親戚関係の3家系から構成された。ローン(Loarn)に繋がるローンの親戚、ノーンガス(nÓengus)に繋がるオーングスの親戚、そしてドマンガイルトの息子ガブラーンに繋がるガブラーン(Gabrán)家系の親戚から構成されていた。この第3の家系から分かれて生まれた血族がコンガル(Comgail)家系で、これは東部アーガイルを拠点にした。この家系のフィングインの息子ダールガルト(Dargart mac Finguine)(685年没)は、ピクト人の国王ブリディ3世(Bridei III)(Bredei son of Beli)(616あるいは628年生-693年没)(在位671年-693年)の娘(あるいは妹)デア・アイレイ(Der-Ilei)と結婚し、2人のピクト人の王を息子に持った。1人は、ブリディ4世(Bridei IV)あるいはBridei mac Der-Ilei(在位697年?-706年)、他はネフタン4世(Nechtan mac of Der-Ilei)あるいはNechtan IV(686年生-732年没)(在位706-724年および729年-732年)であった。

¹² この王国の首都はDun Ollie(ゲール語では,Dùn Ollaigh)であった。ここは、現在、オバーンの北の丘に位置する廃墟になっている。ここには、ダル・リアダ王国時代には、その高い岬の上に、要塞があった。

な根拠があるとは思えない。『Senchus fer n-Alban』¹³(The History of the men of Scotland) と『Duan Albanach』では、ファーガスの父を Erc (Erc mac Eochaid Muinremuir) としている。この年代記は、7世紀ごろのラテン語で書かれた記録を10世紀に古アイルランド語で編纂したもので、ダル・リアダ王国の国王の系図やその王国の国勢に関するものであるが、しかし、ファーガス・モー王についての系図を載せてはいるが、彼の死亡に関する記録は載せてはいない。この年代記からは、ファーガス・モーが実在したという確証¹⁴を得ることはできない。

ファーガス・モーの後継者は、ファーガスの息子ドマンガルト (Domangart mac Ferguso)¹⁵ (507年頃没)であった。彼も伝説上の人物である。彼には2人の息子がおり、それはドマンガルトの息子コンガルとガブラーンであった。6世紀において、ダル・リアダの国王のなかで、その存在の合理性(歴史的証拠)が明らかにされる国王は、ファーガス・モーの孫のコムガル、ガブラーンとファーガス・モーの曾孫のガブラーンの息子アイダーン等である。

1.2 ダル・リアダ王国の王家：ケネル・ガブラーンとケネル・コンガル

『Annals of Ulster』では、ドマンガルトの息子コムガルの死亡年を538年、542年、あるいは545年としている。『Annals of Tigemach』では、その死亡年を537年としている。このことから、彼の死を540年頃と推定することがきる。彼についてはその死亡年以外は不明である。彼は、ゲネル・コンガル (Cenél Comgaill)¹⁶家系の名祖として重要な人物である。最近の紹介では、ゲネル・コンガルがピクト人のケルト化に重要な位置を占めていた家系で

¹³ 『Senchus fer n-Alban』では、Fergus Mór を Mac Nisse Mór としている。

¹⁴ Andrew of Wyntoun の『Orygynale Crorykil of Scotland』(15世紀の初め)には、ファーガス・モーは、スコットランドを統治する最初のスコット人であり、アルピンの息子キナイ (Cináed mac Ailpin) はその子孫であると言う。またファーガス・モーはアイルランドから Stone of Scone を持ってきたと言う。また16世紀の人文主義者ジョージ・ブキャナンは、『Rerum Scoticarum Historia』において、ローマ帝国がブリテンを征服したときにスコット人はスコットランドから逃亡し、ファーガスの父 Enugenus がローマで殺害されたとき、ファーガスはスカンジナビアに逃亡し、フランク族と戦い、その後スコットランドに戻り、そこを Fergus II (ファーガス2世)として支配したと言う。そして、ピクト王 Durstus との戦いで殺害され、Eugenius (Domangart mac Ferguso) が王位を継承した。その人文主義者の見解をデンマークのアンを王妃にしていたステュワート家のジェームズ6世は、彼の王妃アンに捧げた詩にその説を取り入れた。さらに、エディンバラのホーリルードハウスのギャラリーには、ファーガスからチャールズ2世までの89代の王の肖像画が展示されている。森護氏の『スコットランド王国史話』は、この16世紀の人文主義者の見解を取り入れて、ファーガスをファーガス2世と記述している。

¹⁵ 聖アダムナン (Saint Adomnán) の『聖コロンバの生涯』(『Life of Saint Columba』)では、彼を Corcus Réti として記録している。このラテン語は‘聖なるリアダ’を意味し、特に、ケネル・ガブラーンとケネル・ゴンガルに与えられた名前であったと思われる。

¹⁶ その中心は、コウォール (Cowal) とビュート島であった。南はアラン島 (Isle of Arran) まで支配していたと思われる。この首都が何処であったかは確定していないが、ダヌーン (Dunoon) が最も重要であった。

あると指摘されている。例えば、7世紀の中頃、この家系のフィンギンの息子ダルガルト (Dargart mac Finguine) (685年没)は、ピクト人の国王ブリイディ(ブルード)3世(Bridei III, Bruide IIIあるいはBredei son of Beli) (616あるいは628年生-693年没) (在位671年-693年)の娘(あるいは妹)デル・イレイ (Der-Ilei)と結婚し、2人のピクト人の王を息子に持った。1人は、ブリイディ4世(BrideiIVあるいはBruideIV),他はネハタン4世(Nechtan IV)であった。

『Annals of Ulster』では、ドマンガイルトの息子ガブラーンは、ピクト王ブリイディ1世 (Bridei son of Maelchon)¹⁷ (584年から586年の間に没)との戦いで死んだと記録される。この裏付けは、『Annals of Tìngernach』に、558年にスコット人がブリイディ1世の前から逃亡したという事実記述による。よって、この記録からガブラーンの死を560年頃とした。彼は、ダル・リアダ王国に王(king)を提供した Cenél nGabraín 家系の先祖である。ガブラーンの王位は、彼の兄弟のドマンガイルトの息子コンガルの息子ゴナル(Conall mac Comgail)¹⁸ (在位558年頃-574年)に後継された。『Duan Albanach』によると、彼は紛争無く統治したと記されている。しかし、『Annals of Ulster』には、彼が南部イー・ニエルの王 (Colman Bec Diarmato) と共に Iardoaman (現在のインナー・ヘブリーズ諸島の Seil と Islay 島) に遠征したと記録されている。

1.3 その全盛期：アイダーン王の時代

聖コロンバ (521年生-597年没)と同時代人のガブラーンの息子アイダーンは、彼の伯父コンガルの息子ゴナルから王位を継承した。彼については、ベーダの『Historia ecclesiastica gentis Anglorum』、『Annals of Tigernach』や年代記『Annals of Ulster』、『Senchus fer n-Alban』 (The History of the men of Scotland), あるいは聖アドムナン(Saint Adomnán)の『聖コロンバの生涯』にも記録されている。また、『聖コロンバの生涯』によると、アイダーン王は聖コロンバによって、王として聖別(任命)されたブリテン(スコットランド)あるいはアイルランドの最初の王であった。しかし、これらの資料はいずれもアイダーンと同時代人の記録ではない。ベーダの歴史書(the Historia)は、8世紀の30年頃に完成したもので、アイダーン死後120年が経過して書き上げたものであった。また『聖コロンバの生涯』は、聖コロンバの死後100年を記念して出されたものであり、これも同時代者の目であ

¹⁷ ブリイディは、『Life of Saint Columba』(聖コロンバの生涯)に記録されている。それによると、彼がキリスト教徒であったかどうかは確定し得ない。ブリイディ1世の王宮は、インヴァネス西の Craig Phadrig にあったと思われる。

¹⁸ 彼が聖コロンバにアイオナを与えたと言われている。彼は、ダル・リアダ国王に王を提供したゴムナル家系の先祖であった。

イダーンについて書かれたものではない。さらにアイルランドの年代記は、7世紀中旬以降にアイオナ修道院で保存された年代記をまとめたものである。アイダーンの母は、現在のストラスクライドとカンブリア辺りのアルト・カルト (Alt Clut) の王 Dumnagual Hen の娘であったとウェールズの詩に読まれているが、しかし、その詩ではアイダーンの息子としてドマンガイルトの息子ガブラーン (史実では、ガブラーンがアイダーンの父親である) が位置づけられおり、王位の系図が錯綜している。このことから、その詩の真実性は薄いと判断される。

アイダーン王の治績についても断片的にしか知られていない。彼は、574年にコンガルの息子ゴナル (Conall mac Comgaill) から王位を継承した。ゴナルはコンガルの家系に繋がるが、アイダーンは、ガブラーンの家系に繋がっていた。彼の王位継承を巡ってコンガルの家系に繋がるゴナルの息子との間で戦闘があったと推測される。実際、王位継承には争いがあったと記録されている。たとえば、『Annals of Ulster』および『Annals of Tigernach』には、574年にテロハ (Teloch) の戦闘¹⁹でゴナルの息子ドゥンハド (Dúnchad mac Conaill) などの死が記録されている。

575年に聖コロンバの働きかけで、アイルランドのデリー市の近くのリマヴァディ (Limavady) で開催された Druim Cett (Drumceat) 宗教会議には、少なくとも2つの意義があった。第1に、その会議ではアイダーンがダル・リアダ王として承認されたこと、第2に、この会議には、アイダーン王とゲネル・ゴナル (Cenél Conaill) のエンムルハの息子アイズ王 (Áed mac Ainmuirech)²⁰ (在位 569年-598年) が参加して、両王が提携してアルスター (Ulster) 地域を支配し統治していたダル・フィアタッハ王 (King of Dál Fiatach) のガリルの息子ピータン (Báetán mac Cairill) (在位 572年-581年あるいは 586年)²¹ に対抗することが決められたことである。ダル・フィアタッハの王は、ダル・リアダ王に朝貢するように迫っていた²²。多分、ガリルの息子ピータンの死後、アイダーン王は 583年にマン島 (Isle of Man) からダル・フィアタッハを追い出し、彼の支配下に置き、また 580年代の初め、ピクト人の Bridei²³

¹⁹ この正確な場所は不明である。

²⁰ 彼は、北部イー・ニエル (the Northern Uí Néill) の high-king (上王) でもあった。また、彼は、アイオナの聖コロンバの遠縁であった。彼は、576年に上王になった。

²¹ 彼とアイ・マック・エーンムイルハ王の年上の従兄弟であったニインネダの息子バイターンを区別することは難しい。ニインネダの息子バータン (Báetán mac Ninneda) の死亡年は 586 であり、『Annals of Clonmacnoise』は、Báetán mac Cairill の死亡年について 581年と 587年の2つを記録している。

²² 『Annals of Ulster』には、ダル・フィアタッハのガリルの息子ピータン (Báetán mac Cairill) がスコットランドから貢ぎ物を得ていたと記されている。

²³ ブレード王の活動は、560年頃から『Annals of Ulster』や『Annals of Tigernach』に記されている。彼の活動の中心は Fortriu と知られ、現在のインヴァネスの西のクレーク・ハドリック (Craig Phadrig) 近

に支配されていたスカイ島 (Isle of Skye) も支配下に入れ、ダル・リアダ王国の領土を拡大した。アイダーン王の勢力を伸ばした要因にキリスト教の影響を見ることができる。

アイダーンの領土拡大戦略は、その周辺の王国との間に戦闘をもたらした。最初に、ピクト人の王国との戦いについて見ておこう。590年頃に、フォース河上流を活動拠点としていた南ピクト人の同盟軍 (the Miathi あるいは the Maetae) との間で、レイスレイの戦闘 (Battle of Leithreid) が起きた。アイダーン王は、その戦いに勝利したが、しかし、この戦いで彼は、聖アダムナンの『聖コロンバの生涯』 (『Life of Saint Columba』) の記述によると、彼の2人の息子アーサー (Arthur) とイオハズ・フィンズ (Eochaid Find)²⁴ を失った。その後も10年以上に亘り、彼はピクト人と戦闘を繰り返したが、その中で記録に残っているピクト人との戦いには、599年頃以降に起こった、スコットランドの東部のシルシン (キルキン) での戦いがある。これはアイダーン王がピクト王国の奥深くに侵攻したことを物語っているが、しかし、この戦いにおいてアイダーン王は敗北した。

次に、ノーザンブリア地域を支配していたアングル族のノーザンブリア王国との戦いに目を転じよう。603年頃の Degaстан の戦い²⁵ において、アイダーン王はノーザンブリアのアシルフリス王に敗れた。この戦いの詳細は不明であるが、その原因は、ダル・リアダ王国の東進ならびに南進政策とノーザンブリア王国の西進ならびに北進政策による両王国の領土拡張政策の衝突であったと予測される。この戦いに敗れたアイダーン王については、彼の死亡年に関する記述以外には何もない。『Annals of Tigernach』によると、彼は74歳で没した。

『Prophecy of Berchán』²⁶ では、彼は、キンタイヤで死亡したが、その時、彼は王 (king) の座にはなかったと記している。

辺で、ビューリー (Beuly) 湾を見渡す所と考えられている。彼は、584年頃に、同じピクト人でシルシン (現在の Maerns) 辺りを活動の中心としていたピクト人との戦いで殺害された。

²⁴ この2人が彼の息子ではないという資料もある。

²⁵ デグサシダン (Degaстан) は、現在のボーダーのリンデスデール辺りであると思われるが、正確な場所はきめられていない。この戦いについては、場所以外のことに関する詳細は不明である。ペーダの歴史書の説明では、アイダーンは多数の強力な兵を率いたが、アシルフリス (Æthelfrith) は少ない兵で戦った。アイダーンの兵の大半は殺害され、アイダーン自身は逃亡した。アイダーンの兵には、ケネル・ネーガンの王子 (Máel Umai mac Báetáin) や、先のベルニシア王国 (Kingdom of Bernicia) の王ウッサ (Hussa) の王子エリング (Hering) が含まれていた。この戦いで、アシルフリス王は勝利した、だが、彼の兄弟エアンフリス (Eanfrith) とヘオズバド (Thodbald) がケネル・ネーガンの王子に殺害された、とアイルランド年代記 (Annals of Ulster) に書かれている。

²⁶ 『Prophecy of Berchán』は、12世紀に中世アイルランド言語で書かれた詩である。これは2つの部分から構成され、前半は、アイルランド修道院長ベルハン (Berchán) 自身の修道院の歴史である。その後半は、聖パトリック、聖コロンバおよびアイダーン王ならびに25人のピクト王国の国王に関する預言からなっている。ここでは、このピクト王国の王に関するデータをこの資料から得ることになる。

アイダーン王の後継者は、ガブラーン家系のエオハズ・ブルード (Eochaid Buide)²⁷ (在位 608 年-629 年) であった。彼の治世の最後の 2 年間 (627 年から 629 年の 2 年間) の共同治世者は、コンナズ・ケル (Connad Cerr)²⁸ (629 年没) であった。コンナズは、627 年にウルズ王であり、ダル・フィアタハの王であったデムヴァインの息子フィアフナイ (Fiachnae mac Demmáin)²⁹ (在位 626 年-627 年) との間のアルド・ゴルナーン (Ard Cornainn) の戦い³⁰ で彼を敗北させ、コンナズはダル・リアダ王国の王位に就いた。しかし、629 年のアイルランドの Fid Eóin の戦いで、彼は、ダル・ナレズの王であったコンガル・ケイハ (Congal Cáech)³¹ (在位 627 年-637 年) によって殺害された。

1.4 その勢力の陰りとその衰退

エオハズ・ブルード (Eochaid Buide) の後継者は、その息子のドムナル・ブレク (Domnall Brc) (在位 629 年-637 年) であった。ドムナル・ブレクが存在は、『Annals of Tigernach』において、その Cend Delgthen (現在のアイルランド中部東にあった) の戦いで記されている。彼は、ダル・リアダ王国の連携する国を北部イー・ニエルのケネル・ゴナル家系からダル・ナレズ国のコンガル・ケイハ王に変更した。彼は、コンガル・ケイハと連携して、ケネル・ゴナルのアイドの息子ドムナル (Domnall mac Áedo) と戦った。637 年の Mag Rath (ダウン州の Moira) の戦いおよびセルティール (Sailtír) の海戦において、ドムナル・ブレク王とその連合軍は、ドムナル・マック・アイドに敗北した。そして、彼は、642 年に Strathecarron でアルト・カルトのベリの息子エウゲン (Eugein map Beli) (在位期間不明) に敗北し、殺

²⁷ 彼は、ガブラーンの息子アイダーンの息子であった。聖アダムナンの『聖コルンバの生涯』によると、彼の兄弟には、年上のアーサー (Arthur), エオハズ・フィンズ (Eochaid Find), ドマンガルト (Domangart) の 3 人がいた。しかし、『Senchus fer n-Alban』 (The History of the men of Scotland) では、アイダーンの他の息子として Eochaid Find, Tuathal, Bran, Baithéne, Conaig および Gartnait が上げられ、『聖コルンバの生涯』において息子と記されているアーサーは、Conaig の息子と記され、アイダーン (Áedán) の孫とされている。また、ドマンガルトの名前は、『Senchus fer n-Alban』には記されていない。資料からアイダーンの息子を特定することは難しい。

²⁸ 彼は、コンガルの息子ゴナル (Conall mac Comgaill) の息子、あるいは、Eochaid Buide の息子であったのかも知れない。『Senchus fer n-Alban』によると、コンガルの息子ゴナルの息子として挙げているのは、Loingsech, Nechtan, Artan, Tuathan, Tutio, Coirpe そして Connad (あるいは Conall) Cerr であった。『Annals of Ulster』と『Annals of Tigernach』には、彼の息子 Dúnchad の活動について記されているが、Connad Cerr については記していない。

²⁹ 彼は、アルスター地域を支配していた high-king であった Báetán mac Cairill の甥であった。

³⁰ 現在の場所は不明である。

³¹ 彼は、Conall Cláen として知られ、アイルランドの上王 (high-king) でもあった。彼は、Cruithne (アイルランド東北部のウルズにいた民族で、ピクト人の系列と考えられた民族) の系列ではなかった。ゆえに、彼は Fiachnae の孫ではないであろう。

害された。彼の死と共に彼の政策転換も終了した。

第2節 ダル・リアダ王国の内部抗争と従属時代

2.1 内部抗争と従属のダル・リアダ王国：ノーザンブリア王国に従属

Mag Rath（ダウン州の Moira）の戦い後のアイルランドのダル・リアダ王国の消息は全く曖昧である。アントリウム地域のダル・リアダ王国の領土は、ケネル・ネーガン王国とアーギアラ王国の手の中に落ちたと考えられる。一方、スコットランドのダル・リアダ王国の運命は不安定になった。その後、一世代に亘って、そのダル・リアダ王国はノーザンブリア王国に従属することになったと思われる³²。685年にノーザンブリア王国がピクト王国の王ブリィディ3世（在位 671年-693年）に敗北する³³までは、ピクト王国はノーザンブリア王国の従属国であったと思われる。しかし、正確には、その勝利によって、スコットランドのダル・リアダ王国が解放されたかどうかはよく分からない。その後の7世紀のダル・リアダ王について確定したことは言えない。ドムナル・ブレク（Domnall Brcc）の後継者はコンナズの息子ファイルハール（Ferchar mac Connaid）（在位 642年-650年）であった。彼は、コンナズ・ケル（Connad Cerr）の息子で、ケネル・コンガルあるいはケネル・ガブラーンのメンバーであった。『Annals of Ulster』には、彼の死を 694年と記しているが、多分、誤りであろう。『Senchus fer n-Alban』には、コンナズの息子ファイルハールの名前は含まれていない。彼の後の王についても正確には分からない。

次に、ゴナル・クランドムナ（Conall Crandomna）（在位 650年-660年）とコナンフの息子ドンハズ（Dúnchad mac Conaing）（在位 650年-654年）が王位を継いだと思われる。

³² ドムナル・ブルク（Domnall Brcc）の後継者は、コンナズの息子ファイルハール（Ferchar mac Connaid）（在位 642年-650年）であった。彼は、コンナズ・ケル（Connad Cerr）の息子であり、ケネル・コンガル（Cenél Comgaill）あるいはケネル・ガブラーン（Cenél nGabráin）のメンバーであった。『Annals of Ulster』には、彼の死を 694年と記しているが、多分誤りであろう。『Senchus fer n-Alban』には、Ferchar mac Connaid の名前は含まれていない。彼の後の王についても正確には分からない。次に、Conall Crandomna（在位 650年-660年）と Dúnchad mac Conaing（在位 650年-654年）が王位を継いだ。彼らは、654年までは共同支配者であった。654年に Dúnchad mac Conaing はピクト王タルロガン1世（Talorcan Iあるいは Talorgan I）によって殺害された。その後の7世紀のダル・リアダ王は、ドムネルの息子ドマンガルト Domangart mac Domnaill（在位 660年-673年）、Máel mac Conaill（在位 673年-688年）、Domnall Donn（在位 693年-696年）、Ferchar Fota（在位 697年）、Eochaid mac Domangairt（在位 697年）、Ainbeclach mac Ferchair（在位 697年-698年）、Fiannamaillua Dúnchado（在位 698年-700年）であった。

³³ これはダンニヘン（Dunnichen）の戦いである。ノーザンブリア王国の王は、エクフリス（Ecgríth）（在位 670年-685年）であった。彼は、オズウイ（Oswui）（在位 642年-670年）の子であり、オズワルド（Oswald）の孫であった。ピクト王国（フォトリッ）のブリィディ3世は、ノーザンブリア王国に従属していたが、この戦いでノーザンブリアを全滅させ、祖父の南部ピクトの地をノーザンブリア王国から永久に解放した。

彼らは654年まではダル・リアダ王国を共同で統治したが、654年にドゥンハズがピクト王のタロルガン1世 (Talorcan I あるいは Talorgan I) (在位 653年-657年) との戦いで殺害された。その後のダル・リアダ王は、ドムネルの息子ドマンガルト (Domangart mac Domnail) (? 在位 660年-673年) であったと思われる。これも確かではない。『Annals of Ulster』には、673年にダル・リアダ王ドムナル・ブレク (Domnall Brcc) (在位 629年-637年) の息子ドマンガルトの死が確かに記録されている。しかし、『Duan Albanach』には彼は王として挙げられていない。さらに、彼の後継者が誰かも明らかではない。彼の後継者が、ケネル・ガブラーンの家系か、あるいは、ケネル・ローンの家系かも明らかではない。誰が王の候補者になったのであろうか。その候補者となったと考えられる人々は、ゴナルの息子マエル・ドゥン (Máel Dúin mac Conaill) (多分 在位 673年-688年)、ドムナル・ドン (Domnall Donn) (? 在位 693年-696年)、あるいはフェルハル・フォタ (Ferchar Fota) (在位 ?-697年) の3人である。マエル・ドゥンは、ゴナル・クランドムナの息子であった。彼はケネル・ガブラーンの家系に属する。ドムナル・ドンもゴナル・クランドムナの息子であった。彼は、兄のゴナルの息子マエル・ドゥンの共同統治者であったのかも知れない。しかし、彼らがダル・リアダ王国の high king であったかどうかは確定できない。この2人はキンタイヤの王 (Lord) であったのかも知れない。フェルハル・フォタはケネル・ローン家系に属し670年代にダル・リアダの王であったかも知れない。というのは、『Annals of Tigernach』には678年ブリトン人を殲滅するために、彼がティレ (Tiree) の戦いでケネル・ローンを指揮したという記述がある。しかし、『Annals of Ulster』にその戦いは記録されているが、彼の名前は記されていない。『Duan Albanach』には、彼が21年間ダル・リアダ王国を統治したとある。この資料からすると、彼は670年代からダル・リアダ王国の王であったのか、それともドムナル・ドンの死後にその王国の王になったのかどうかは確定できない。

フェルハル・フォタの後継者がドマンガイルトの息子エオハズ (Eochaid mac Domangairt) (在位 697年) であったと思われる。彼は、ケネル・ガブラーン家系に属し、ドムネルの息子ドマンガルトの息子であった。『Duan Albanach』には、彼の名前だけが挙げられている。『Annals of Ulster』に697年にドムナル・ブレクの孫エオハズの死が記録されている。エオハズの後継者は、フェイルハルの息子エンベククラハ (Ainbeclach mac Ferchair) (在位 697年-698年) であったと思われる。彼は、ケネル・ローンの家系に属し、フェルハル・フォタの息子であった。彼は、戦いに敗れ、アイルランドに逃亡したと記録されている。その戦いが弟セルバハ (Selbach) との間であったのか、それともケネル・ガブラーンの家系との争いであったのかは確定できない。彼は、何年の間逃亡していたのか不明であるが、719年にアイルランドから戻ったが、Finnglen (ロッホ・フィン) の戦いでセルバハに敗れ、死んだ。彼の後継者は、フィアンナヴァル・ウア・ドゥンハド (Fiannamaill ua Dúinchado) (在位 698年-700

年)であった。彼については、700年頃に死んだこと以外に何も分からない。彼は、ゴナンズの息子ドゥンハズ (Dúnchad mac Conaing) (在位 650年-654年) の息子で、アイダーン王の末裔で、ケネル・ガブラーンの家系に属した。彼の記録に関しても資料間で整合しない。

『Annals of Ulster』では、彼をダル・リアダの王として名を示しているが、『Annals of Tigernach』では、彼をダル・ナレズ (Dál nAraide) の王と記録している。『Book of Leinster』では、王の系列に彼の名前はない。

フィアンナヴァル・ウア・ドゥンハド (Fiannamail ua Dúnchado) (在位 698年-700年) の後継者は、ファイルハールの息子シェルバハ (Selbach mac Ferchair) (在位 700年-723年) であった。彼は、ファイルハール・フォタ (Ferchar Fota) (在位 697年) の息子で、ケネル・ローン家系に属した。彼の時代は戦いの時代であった。それは、シェルバハが698年に彼の兄ファイルハールの息子エンベクルラハを退位させたことから始まった。彼は、701年に Dún Ollaigh を破壊し、704年にブリトン人のアルト・カルトとの間の Glen Lemnae (Loch Lomond) の戦いで敗北、711年の Lorg Ecclat でブリトン人との戦いで勝利、712年には Aberte (キンタイヤのサウスエンド近くの Dunaverty) を包囲した。719年には、彼の兄エンベクルラハを Finnglen (ロッホ・ファイン) の戦いで敗北させ、殺害した。同じ年の一か月後、彼はケネル・ガブラーン家系のキンタイヤ王のドゥンハズ・ベク (Dúnchad Bec) に敗れたが、ドゥンハズが721年に死んだため、彼は紛れもなくダル・リアダの王になった。これは、20年ほど続いたダル・リアダ国内の内戦が終了したことを意味すると思われる。723年に彼は、王位を譲り、修道院に退いた。王位はシェルバハの息子のドゥンガル (Dúngall mac Selbaig) (在位 723年-726年) に引き継がれた。彼は、直ぐにケネル・ガブラーン家系に権力を奪われた。その理由は分からない。彼は、726年過ぎには、ダル・リアダ王国の王 (High King) ではなく、ケネル・ローンの王 (Lord) であった。731年に彼は、Tairpre Boitir (ロッホ・ファインの Tarbert) を焼いた。733年には、ピクトのブリィディを強制的に退去させることによって Tory 島を冒瀆した³⁴。その後、ケネル・ローンの王にはアンベクルラハの息子ムイルダハ (Muiredach mac Ainbcellach) が就いた。

次に、ムイルダハ (Muiredach mac Ainbcellach) (在位 733年-736年) が王になった。彼は、ファイルハールの息子エンベクルラハ (Ainbeclach mac Ferchair) (在位 697年-698年) の息子で、ケネル・ローン家系に属した。736年に Talorgan mac Fergusa の旗下のピクト軍によってエンベクルラハは敗れ³⁵、彼は退位した。彼は、ピクト王ファーガスンの息子オエンガス (Óengus mac Fergusa) (在位 732年-761年) の下にあったピクト人 (ピクト王国)

³⁴ このことは、『Annals of Ulster』に記されている。

³⁵ この戦いについては『Annals of Ulster』に記録されている。

に侵攻され、征服された。彼以後のダル・リアダ王国はオエンガ王の支配下にあった。

2.2 従属時代のダル・リアダ王国：ピクト王国

ムイルダハの息子エオガン (Eógan mac Muiredaig) (在位期間不明；730年代) は、エンベクルラハの孫で、ケネル・ローンの家系に属した。だが、彼の名前はアイルランドの年代記には記録されていない。また、『Duan Albanach』にも彼の名前は現れてはいない。『Chronicle of the Kings of Dál Riata』に彼は、ダル・リアダの王エオガンとして現れる。エオガンの治世は、ダル・リアダ王国がオエンガス1世の下のピクト人に侵攻され、征服される時期であった。そのため、彼の後継者が誰かは不明である。その後、少なくとも30年間、ダル・リアダの領土は、ピクトのオエンガス1世に占領された。

アイズ・フィンズ (Áed Find) (在位768年以前？-778年)³⁶が次のダル・リアダ王国の王であった。彼は、エフダフの息子エオハズ (Eochaid mac Echdach) (在位726年-733年)の息子で、ケネル・ガブラーンの家系に属した。768年に、彼が Fortriu にてピクト王キニオツズ (Ciniod)³⁷ (在位763年？-775年) と戦ったことが『Annals of Ulster』に記録されている。これは、741年以降のダル・リアダ王に関する初めての言及であった。

エフダフの息子ファガス (Fergus mac Echdach) (在位778年？-781年) がアイズ・フィンズの後継者で、エオハズの息子であった。彼は、王として死んだことが記録されている。彼がピクト王コンスタンティン1世 (Constantín IあるいはConstantín mac Fergusa) (在位789年-820年) とオエンガス2世 (Óengus mac Fergusa) (在位820年-834年) 兄弟の父親であったという説がある。しかし、この説は受け入れられていない³⁸。次の王はドンゴイルケ (Donncoirce) (792年没) であった。彼は、現存するアイルランド年代記のダル・リアダ王国の王と呼ばれる“最後の国王”である。『Annals of Ulster』に彼の死は報告されている。しかし、『Duan Albanach』などの他の年代記には彼の死についての記録はない。これ以降は、ダル・リアダ王国はピクト人に支配され、ピクト王国の王がダル・リアダ王を兼ねたと思われる。9世紀になって、タイズグの息子ゴナル (Conall mac Taidg) (在位805年-807年)、アイダーンの息子ゴナル (Conall mac Áedáin) (在位807年-811年)、コンスタンティ

³⁶ 彼がピクト王ケニス1世 (Cináed mac Ailpín) (在位843年？-858年)の曾祖父であるという説があるが、これは中期中世の捏造であると思われる。『Chronicle of the kings of Alba』にアルピンの息子ドナルド (Donald Mac Ailpín) (在位858年-862年)の治世にアイズ・フィンズの支配を採用したと報告されているが、その内容は不明である。

³⁷ 彼の父親ウルダッハ (UuredachあるいはFeradach)は、ダル・リアダ王国の王フェルハイルの息子セルバハ (Selbach mac Ferchair) (在位698年？-723年)の息子であった。

³⁸ その兄弟は、ピクト王オエンガス1世 (Óengus IあるいはÓengus mac fergusso) (在位732年-761年)の親戚 (例えば、孫あるいは甥の息子) であると考えられている。

ンの息子ドムナル（Domnall mac Caustantfn）（在位 811 年-835 年）などのダル・リアダ王国の王と思われる名前が伝えられている。この 2 人のゴナルについては、『Annals of Ulster』で言及されている。タイズグの息子ゴナルはピクト王コンスタンティン 1 世と戦い、敗北し、逃亡したと記録され、アイダーンの息子ゴナルはタイズグの息子ゴナルを殺害したと記録されている。

また、コンスタンティンの息子ドムナルは、『Duan Albanach』によると、24 年間ダル・リアダ王国を治めたと記され、他の資料では彼は、2 人のゴナルとボアンタの息子アイズ（Áed mac Boanta）（在位 835 年-839 年）の間で、その王であったと記録されている。この 2 つの記録からピクト王国の王コンスタンティン 1 世の息子ドムナルがダル・リアダ王国の王であったと推測される。この時点でダル・リアダ王国は、ピクト王国の支配下に入ったと考えられる。これによってピクト王国にゲール文化が入り込み、ピクトとゲールの融合が、徐々にではあるが、浸透したと思われる。その後のアルバ王国が両文化の融合を示していると思われる。

第 3 節 ダル・リアダ王国とキリスト教

3.1 ダル・リアダ王国とキリスト教

この王国は、先住民であるピクト人との間に激しい抗争を引き起こした。その後の多くのダル・リアダ王国の歴代国王は、ピクト人との抗争とによって、落命していた。このことからスコット人とピクト人の抗争が尋常ではなかったと推測される。アイルランドからのゲール人のスコットランドへの侵攻と同時に、キリスト教がスコットランドのダル・リアダ王国やピクト王国に伝播したと考えられる。その担い手はアイルランド修道士であったと推測される。その布教は、5 世紀ごろからアイルランド修道士によって本格的に始められたと推測される。

4 世紀末あるいは 5 世紀初めに、ブリトン人の聖ニニアン（Saint Ninnian）³⁹（360 年生？-432 年没）は、スコットランド南西部（ギャロウエイ：Galloway）のウィットホーン（Whithorn）に中心を置き活動した。彼は、397 年にウィットホーン半島の南端にカンディダ・カサ修道院

³⁹ 聖ニニアンについては、不明なことが多いのであるが、伝統的には、ペーダのイングランド教会史によると、彼は、ブリトン人で、ローマで研究した。そして、彼は、ウィットホーン半島の南端にカンディダ・カサ修道院（Monastery of Candida casa）を建て、キリスト教管区を形成した。その修道院から多くのアイルランド修道士を輩出している。その中には、アイルランドのアラン島にキレイニ修道院（Monastery of Killeany）を建てた聖エンダ（Enda of Aran）（530 年没？）やウルガータ聖書をアイルランドにもたらしたモヴィル修道院（Movilla Abbey）をウルスター州に建てた聖フィニアン（Saint Finnian of Moville）（495 年生-589 年没）がいる。

アイルランドの聖人については、『アイルランド聖人録』（Catalogus Sanctorum Hiberniae）に詳しい。

(Candica Casa, その意味; White House) を建設し, スコットランド東岸からシェトランド諸島(Shetland Islands)に至るピクト人の支配地域にキリスト布教の宣教を展開し, 特に, 南ピクト地域(クライド湾およびフォース湾の北側で, グランピア山の南側の地域)に住む人々に伝道し, キリスト教を布教したと考えられる。その地域では, 既に, ローマ教皇の影響下にあった聖パトリック(Saint Patrick)(387年生?-461年?)がキリスト教の宣教活動をしていただと思われる。その後, 6世紀には, アイルランド修道士は, ペリグナリティオ(異教滞在あるいは異教遍歴)の精神でスコットランド, イングランド, そして大陸に旅だった。それは, 自身の魂の救いのために新しい故郷を求める贖罪の意味を込めた行為であった。その思想をもってスコットランドに遣ってきた修道士の最初の人物は, アイルランドの聖オラーン(Saint Otteran, あるいは, Saint Oran)⁴⁰(548年没)であったと知られている。彼は, アイルランドからスコットランドに渡り, キリスト教の布教を行ったと考えられるが, その活動の詳細についてはよく分かっていない。彼は548年にアイオナ島で死亡したと伝えられている。実際に, 彼の墓はその島にある。次に, 聖コロンバ(Saint Columba, あるいは, Saint Colum Cille)⁴¹(521年生-579年没)は, 563年にスコットランドにアイルランドから布教に遣ってきた。彼は, アイルランド北部地方のアルスターの部族長の子として生まれ, キリスト教の教えを受けて育った。キリスト教の宣教地域としてスコットランドを選び, 内ヘブリデー諸島のアイオナ島に渡り, ハイ修道院を建設した。563年に彼は12人の仲間を伴ってキンタイヤ半島の南端のサウスエンド近くに上陸し, ピクト人への宣教拠点をアイオナ島に置いた。彼はここに34年間留まり宣教活動をおこなった。彼は, インヴァネス地方の宣教のため, そこに拠点を持っていたピクト人で異教徒であったと思われる, ピクト王ブリイディ1世あるいはブルード1世(Bridei あるいは Brude I)⁴²(後の歴史家が Fortriu 地域の王)

この聖人録の成立は8世紀から9世紀である。そこでは, 教会の歴史を3期に分けている。第1期は544年まで, 第2期は598年まで, そして第3期を664年までと区分している。第1期は非独身主義の司教, 第2期は女性の社会を避け, 修道院から女性を排除する独身主義の聖職者の時期, 第3期は荒野に住み, 私所有財産を捨て喜捨によって生活する禁欲主義の時期であった。

⁴⁰ 彼は, 5世紀にティア・ゴネル(Tir Conail)王国をアイルランドに建てたゴナル・グルバン王(King Conall Gulban)(?)の後裔であった。彼は, 聖コロンバ(Saint Columba)よりも先に, ピクト人にキリスト教を伝えるためにアイルランドからスコットランド渡って来ていた。彼はアイオナでは尊敬された。

⁴¹ 彼はアイルランド12使徒の一人であった。彼は, 現在のミース(Meath)地方のボニー川(River Boyne)のほとりにあったクロナード修道院(Clonard Abbey)の修道士であった。そこで, 詩編の複写の所有権を巡りモヴィル修道院の聖フィンニアン(Saint Finnian)(579年没)と口論になり(560年), それが死人を出す争いに発展した(561年のBattle of Cul Dreimhne)。そのために聖職者と門人で構成される宗教会議で彼は破門された。563年に彼と12人の仲間はスコットランドに向かって旅立った。

⁴² ウルスター年代記(The Annals of Ulster)によると, ブルード(ブリイディ)1世は584年あるいは588年に死亡した。『聖コロンバの生涯』をコロンバ以後9代目の修道院長アドムナン(Adomnán)(627年あるいは628年生-704年没, 在位679年-704年)は残している。それからは, コロンバがブルード(ブリイ

を訪れ、その地域での布教の許可を得た。彼は、ヘブリデーズに幾つかの修道院⁴³を建てて積極的に宣教活動を繰り広げ、アイオナの修道院を宣教のための学校として活動し、アイオナ島⁴⁴で死亡した。彼自身が建てた寺院に彼は葬られた⁴⁵。キリスト教⁴⁶は、ピクト人とスコット人ととの間での勢力争いの緩和と両民族の融和に大きく貢献したと思われる。

また、アイルランドから来た聖モルア（Saint Moluag, あるいは、Saint Molua）⁴⁷（530年生？-592年没）は、聖コロンバ（Saint Columba）と同時代の宣教師であった。彼は、アイルランド生まれの貴族であり、アーガイル(Argyll)⁴⁸の北部ピクト人のブリィディ1世(Bridei あるいは Brude I) からキリスト教宣教の許可を得ていた。ロッホ・リン（Loch Linnhn）のリーズモア(Lismore)⁴⁹島に修道院を建て、ピクト人へのキリスト教の宣教を始めた。次に、ロス地方のローズマーキー（Rosemarkie）⁵⁰、ダフトタウン(Dufftown)⁵¹のモルトラック

ディ）王に会ったときに、ブリィディ王がすでにキリスト教徒であったか、あるいは、聖コロンバが彼をキリスト教に改宗したのかどうかは分からない。

⁴³ 彼は、アイオナ島の周囲の小島ディレ、ブレナ、ヒンバ、スキーにも小修道院を建設した。彼の名声は、スペイン、ガリア、そしてローマにも聞こえたと伝えられている。彼は、デリー、ダロー、アイオナの3修道院を建てたとされる。

⁴⁴ この島には、アルピン王家のダンカン王(King Duncan)（在位 1034年-1040年）やマクベス王(King Macbeth)（在位 1040年-1057年）の墓を含む11世紀までの王族の墓がある。このことは、小岩だらけのアイオナ島の修道士がいかに当時のスコットランド人から尊敬されていたかを知ることができよう。

⁴⁵ 後に彼の墓を掘り起こし、聖パトリックや聖ブリジッドと共にアイルランドのダウン州のDownpatrickに埋葬された。

⁴⁶ スコットランドへのキリスト教の布教は、5世紀ごろに始まり、ブリトン人の聖ニニアンがスコットランド南西部ならびに北部に布教したことから始まったと言われている。その後、6世紀には、アイルランドの聖オラン、次に6世紀後半以降には、アイルランドから聖コロンバ、聖モルア、聖エイダンらがスコットランドに渡来し布教を行った。その中の一人が聖コロンバであった。彼の後継者のスコットランド人の聖カスパースはノーザンブリア王国に宣教を行った。

⁴⁷ 彼は、アイルランド Dal nAraide 貴族の出、アイルランドのバンゴール(Bangor)修道院において聖コンガル(Saint Comgall)（597年あるいは602年没）の下で教育を受けた。彼は、聖コンガルに同伴しスコットランドに来て、北部ピクト人のブルード（ブリィディ）1世（Brude あるいは Bridei I）に会見し、キリスト教の宣教の許可を得た。ブリィディ王は、聖コロンバよりも聖モルアを好んだ。というのは、聖コロンバがケルトの指導者 Dal Riata に親しかったからであったと思われる。このことは、ピクト人の居住地域に宣教したのは聖モルアであり、聖コロンバが Dal Riata の影響下にあった地域に宣教したと考えることもできる。

⁴⁸ 彼は、1544年にアーガイル伯によってアーガイルの聖守護神にされた。聖モルアの後継者は、MacLea 氏族のリヴィングストン首長である。リヴィングストン一族は、長い間、その聖人の錫杖の世襲的保持者であった。

⁴⁹ スコットランドの内ヘブリーズにあるゲール語を話している島である。ここは、聖モルアによって建てられた修道院があり、アーガイル司教の所在地になった。19世紀以降、ここの人口は減少し、2001年の人口は146人で、その内46%は60歳以上であった。

⁵⁰ ブラック・アイルの南海岸にある村である。ここは、8世紀から9世紀のピクト石彫刻の集まるところとしてよく知られている。これは、聖モルアあるいは聖クルターン(Saint Curretán)（7世紀生-8世紀に没）

(Mortlach)にも伝道を中心となる修道院を立て、ピクトヘキリスト教を弘めた。この3地点が彼の宣教の拠点であった。そしてこの3地点が、島嶼部、ロスおよびアバディーンでのローマ・カトリック教区の中心地になった。彼は、592年に死亡し、マリ湾のローズマーキーに埋葬されたが、後に、彼の遺体はリーズモアに移送さ、彼の名を冠した大聖堂に埋葬されている。また、島嶼部に修道院を開き、北西ピクト人にキリスト教を弘めた修道士に聖ドナン(Saint Donnán)(617年没)がいた。彼は、617年にピクト人の女王に殺害された。彼は、アラン島のKildonnan⁵²に埋葬され、エッグ(Eigg)島の守護神で聖人である。

聖エイダ(アイダン)(Saint Aida,あるいは、Saint Áedán)⁵³(651年没)は、アイルランドのコナハト(Connacht)の出身で、スコットランドのアイオナ島の修道院の修道士であった。彼は、ノーザンブリア地方にキリスト教を伝え、その宣教の拠点を聖なる島リンディスファーン(Lindisfarne)におき、修道院を建て、その初代司教になった。この島を宣教の拠点に選んだのは、その島がアイオナ島に似ていたこと、また、ノーザンブリア王国の王オズワルド(King Oswald)⁵⁴(604年生?-642年没)の要塞に近かったことであった。オズワルド王は、アイオナの修道院からの宣教者を求め、634年にノーザンブリア王国を支配し、その異教徒のノーザンブリア地域の人々にキリスト教を布教することを決定した。彼は、ローマ・

によって建てられた、あるいは関係した修道院があったことを示している。ローズマーキー石は、sandstoneに彫られている。この石の表面には、十字架が装飾され、その裏面には、3つの三日月やV字の棒やZ形の棒などのピクト・シンボルがあった。

⁵¹ スコットランドのマリーにある町である。ファイフ伯が兵士の住宅を建てた19世紀まで、ここは、モートラック(Mortlach)と呼ばれた。この周辺一帯は、中世には、モートラック教区を形成していた。

⁵² この地名は、彼に因んで付けられた地名である。Kildonnanという地名は、アラン島のほかにも、エッグ島、アルシュ湖、南ウイスト島、西ロスのLittle Loch Broom、スカイ島、ルイス島にもある。これは彼の宣教の広さを知る上でヒントになる。

⁵³ エイダについては、聖ベダ(Saint BedeあるいはVenerable Bede)(672年あるいは673年生-735年没)の『イングランド人の教会史』(731年)による。ベダによると、イングランドの使徒の榮譽は、ローマ教皇グレゴリウス1世(Pop Gregory the Great)(在位590年-604年)によって遣わされた聖アウグスティヌス(Saint Augustinus)(在位597年-604年)にではなく、エイダに拠るべきであると、言う歴史家もいる。エイダの弟子達は、ノーザンブリア王国を越えて、南方へ宣教した。マーシャ(Mercia)王国やエセック(Essex)王国にも宣教した。

彼は、ノーザンブリア王オズワルドから、監督管区としてリンディスファーン島を与えられた。

⁵⁴ 彼が11歳で616年ごろ、彼の父アシルフリス(AEthelfrith; King of Bernicia)(在位593年-616年)が東アングリア王国の王ライドワルド(Raedwald)(在位600年?-625年)によって殺害された(叔父,Edwyn of Deiraによって父が殺害されたという説もある)ので、彼は北方のダル・リアダ王国、彼の兄はピクト王国で逃亡生活を送った。ノーザンブリア王にはエドウィン(Edwin)(586年生?-632年あるいは633年没)が就いた。デイラ王国(Kingdom of Deira)とベルニシア王国(Kingdom of Bernicia)の王(ノーザンブリア国王)であったエドウィン(在位616年-632あるいは633年)がギニド(Gynedd)王国の王ケドワロン(Cadwallon)とMercia王国のペンダ(Penda)王の連合体に633年にハットフィールド(Hatfield)の戦いで敗れ、殺害された。ノーザンブリア王国は、BerniciaとDeiraの2つの王国に分かれた。オズワ

カトリックではなく、スコットランドで弘まっていたアイルランドのキリスト教を選んだ。また聖カスパース (Saint Cuthberth)⁵⁵ (634年生? -687年没) は、ダンバー (Dunbar) の近傍で生まれたノーザンブリア王国⁵⁶の修道士であり、司教であった。彼は、聖エイダンと同様にリンディスファーン島で修道士としてキリスト教を広め、ノーザンブリア王国の守護聖人であった。

キリスト教の布教が、ピクト人のキリスト教化に導き、すでにキリスト教徒であったスコット族と (新しくキリスト教徒になった) ピクト人とを、同じキリスト教徒であることから融和させ、スコット族とピクト人を共同させ、異国からの侵入者に対抗させる力を与えることになったと推測される。

ダル・リアダ王国とピクト王国の連合王国 (アルバ王国) を建国したケネス 1 世 (Kenneth I あるいは Kenneth MacAlpin)⁵⁷ (在位 843 年-859 年) は、キリスト教の信仰の中心地をス

ルドは、ヘヴンフィールド (Heavenfield) の戦いで Cadwallon を倒し、634 年から 642 年までノーザンブリア王国の王になった。ベアダによると、彼は 8 年間ノーザンブリア王国を治めたことになる。彼は、Bernicia と Deira の 2 つの王国を 1 つの王国に統一し、キリスト教を広めた。しかし、オズワルド王は、642 年に Mericia 王国の Penda 王とのマザーフィールド (Maserfield) の戦いで殺害された。

⁵⁵ 彼は、651 年にオールド・メルローズ (Old Melrose) の修道院で修道士になった。その後、何年間、彼は軍人になった。彼は、ノーザンブリア王国の Aldfrith 王の又従兄弟であった。よって、Aldfrith が王として戴冠し、その国王が Ripon に新しい修道院を建てたとき、彼は visitor ホストになり、その後、副修道院長になり、多くの時間を奉仕、説教、布教、そして奇跡の実行に費やした。しかし、ワイトビー宗教会議 (Synod Whitby) の決定を受け入れ、ローマ・カトリックの方式を受け入れた。彼は、その後も宣教活動を続け、ペリクからギャロウエイに至る地域に布教し、ダル (Dull) に大きな十字架の付いた小さな礼拝堂を建て、修道院とした。エディンバラに聖カスパートがカスパート教会を建てた、と言われている。

676 年に彼は隠遁生活に入った。聖なる島の南にあった Farne 島に穴を掘り、独居生活を始め、Eider 鴨などの海鳥を護る特別な法律をもうけた。684 年に彼はリンディスファーンの司教に選出された。685 年にヨークで大司教のテオドルなどによって聖職者に任じられた。しかし、686 年のクリスマスに、彼は Farne 島の個室 (独房) に戻り、そこで 687 年に死亡した。

⁵⁶ 7 世紀頃、ノーザンブリア王国は、北東イングランドおよびフォース湾までの南東スコットランドを含んでいた。

⁵⁷ 彼の名は、ゲール語では、Cináed mac Ailpin である。彼がアルバ王国の創始者であるという見解は、彼の死後、100 年以上経過して生まれた。『Chronicle of the Kings of Alba』によって、彼はその創始者であると祭り上げられた。これは、アルバ王のケネス 2 世 (Kenneth II あるいは Cináed mac Maíl Coluim) (在位 971 年-995 年) の時代に編纂されたものである。

ケネス 1 世の治世は、ヴァイキングとの戦いでピクト王達が殺害された後に訪れた。フォトリウのオエンガス 2 世 (Óengus II) (在位 820 年? -834 年) の息子ウエン (Uuen あるいは Wen) (在位 839 年-842 年) あるいはオーワナ (Eóganan mac Óengusa) (在位 837 年-839 年)、ポアンタの息子アイダ (Áed mac Boanta) および他の多くの数え切れない人々の死後に彼の統治がくる。これは、『Annals of Ulster』に報告されている。

もし『Chronicle of the Kings of Alba』の記述が正しければ、オーワナ (Eóganan mac Óengusa) の死後、4 人以上の王候補者が戦ったことになる。Uurad, Bridei VI, Ciniod, Bridei VII, そして Drest X が王候補者としてあげられる。『Chronicle of the Kings of Alba』では、ケネス 1 世の治世の始まりを

クーンの北西のダンケルドに移した⁵⁸。内へブリディーズ諸島のアイオナ島に埋葬されていた聖コロンバの遺骨を政治の中心地スクーンの北西のテイ川に臨むダンケルドに移し、その王国のキリスト教信仰の中心地とした。この移転によって、ピクト人のキリスト教とゲール人のキリスト教が融合し、キリスト教が地域にもじわじわと伝わり、武力での制圧ではなく、宗教面からスコット族とピクト人の融和統合が進展させられた。

スコットランドにキリスト教を広めたアイルランド修道士の生活について言及しておこう。その生活態度はローマ・カトリックのものとは異なっていた。アイルランドの修道士の際だった特徴は、異教遍歴あるいは異教滞在と訳されるペリグリナリティオであった。これは、自分自身の魂の救いを求める贖罪の意味を伴った禁欲的動機に基づく行為であった。アイルランドでは、修道院長が行きずりの修道士を修道院長として任命し、彼自身は遠方の国に旅立つたり、あるいは、修道院長と修道士が共に修道院を捨て去り、あるいは、修道院長が修道士に行き先も告げずに修道院を後にすることもよくあった。この思想は、神のお告げによって、アブラハムがウルを離れ、イスラエルに地に至った⁵⁹、ということに根拠を置くと思われる。これは、ベネディクト修道会が定住して修道したのとは大きな違いである。アイルランドの修道院は一般に規模が小さかったと考えられる。実際、聖コロンバが布教活動の基地にしたアイオナ島の修道院跡の僧房は小さい。

アイルランドの修道士達は厳しい修行を積んだだけではなく、学問の熱い愛好者でもあった。アラン島のクレイニ修道院、聖コロンバが教育を受けたクロナード修道院、聖モルアが教育を受けたバンゴール修道院が有名であったが、これらは聖ニニアンが開いたカンディダ・カサ修道院の影響を受けたと考えられるが、それ以上にアイルランド人の学問尊重の気風に負っていたと思われる。彼らは、ラテン語、ギリシャ語、そしてヘブル語にも習熟していたと言われる。また文法、数学、天文学、哲学、聖書学にも通暁していたと言われる。彼らの高い教養はシリアやエジプトなどの東方世界との交流によって培われたと思われる⁶⁰。

アイルランドの修道士と大陸の修道士（主にベネディクト修道士）との違いの一端をその修道士会則あるいは共住生活規則を比較することによって知ることができる。12人の修道士と共にアイルランドからブルゴーニュのヴォージュ地方まで旅をし、そこに修道院を開いた

845年頃としている。

⁵⁸ 彼の治世の7年目に聖コロンバの遺骨をアイオナ島からダンケルドに移したと『Chronicle of the Kings of Alba』に報告されている。

⁵⁹ 聖書の創世記において、アブラハムがイスラエルの地に行くように神に告げられる。「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、私が示す地に行きなさい。」(創世記12章第1節)に記されている。

⁶⁰ 当時、アイルランドは智慧の乳房と呼ばれていた。西サクソン人の司教アルドヘルム(Aldhelm)(在位705年-709年)はアイルランドを智慧の乳房と言っていた。

のが聖コロンバヌス (Saint Columbanus)⁶¹ (540 年生-615 年没) であった。彼は、『修道士規定』(Regula monachorum) と『共住生活規定』を残している。前者の第 3 章は飲食に関する規定である。そこでは、修道士の食物は素食を旨とし、夕刻に一回摂り、飽食は避け、飲物は酔うものを避けるように規定している。野草、野菜、水で湯がいた小麦粉、それに少

⁶¹ 聖コロンバヌス (Saint Colmbanus) は、フランク王国 (現在のフランス) にゲールの罪を後悔し、修道士に告白する修道院規則を弘めた聖職者であった。彼は、アイルランドのミース州 (County of Meath) の Nobber で生まれた。彼の名は Colum (鳩) あるいは Colum Bán (White dove: 白い鳩) の愛称と考えられる。彼は、ハンサムな顔立ちで、好印象を与える人物であったために、その地域の女性の恥づべき誘惑に晒され、その誘惑に闘った。彼は、家を去り、ロッホ・アーンに住んでいた Sinell という修道院長に師事した。その後、彼は、聖ゴムガル (Saint Comnall) (510 年生?-597 年あるいは 602 年没) によって建てられたバンゴール修道院 (Monastery of Bangor) で何年間か活動し、40 歳ごろに、外国で説教するという神からの啓示を受けた。そこで、彼は、12 人の同僚 (例えば、アッタラ (Attala)、ディコラス (Deicolus)、聖アドマン (Saint Adomán)、聖ガル (St. Gall) など) と船に乗り、コーンウエルかあるいはスコットランドを通過して、ブリテンを通過して、フランス (ブルゴーニュの Carnac 海岸に上陸) に渡った (585 年)。フランスでは、野蛮人の侵入や聖職者の怠惰のために、悪習と不信心が広まっていた。フランスでは修道士および説教者に対する必要性が高まっていた。その人々は、コロンバヌス達の穏やかさや忍耐力、かつ、その謙遜さに打たれた。

彼らは、ブルガンディー (Burgundy) のグントラム王 King Gontram あるいは Guntram (在位 561 年-592 年) の宮廷に行った。その王が、コロンバヌス達に彼の王国内に留まるように要請したので、彼はそれに従った。彼らはその王からヴォージュ山地の荒野のアネグレイ (Annegray) にあった半壊したローマ要塞を与えられた。彼らの食物は、森のハーブ、ベリーおよび若い樹木の皮であった。彼の高德の名声が修道院に多くの群衆を集めた。病人は彼らの祈りで癒された。数年後、アネグレイから 8 マイル離れた所のガリア・ローマ人の城 (Luxovium) を与えられた。そこに彼らは 590 年にリュクイユ修道院 (Luxeuil Abbey) を建てた。さらに、第 3 の修道院がフォンテイン (Fontaines) に建てられた。

彼は、20 年程フランスに居住し、そしてその間旧い日付による復活祭を祝った。復活祭の日付を巡る論争が起こった。また、フランクでは 6 世紀前半の宗教会議によって、司教に絶対的権が与えられており、修道士は定期的に司教の前に現れ、その支持を得なければならなかった。しかし、コロンバヌスはケルトの慣習に従い、司教の支持に従おうとしなかった。そのためにフランクの司教達は、ゲール人の修道士に敵意を持っていた。

グントラム王の死後、聖コロンバヌスは、王宮の腐敗とも戦わなければならなかった。グントラム王の後継者は彼の甥でオーストラシア王でもあったキルドベルト 2 世 (Childebert II) (ブルガンディー王: 在位 592 年-595 年) であった。彼には 2 人の息子があった。1 人は、彼の死後ブルガンディーを継いだテウデリク 2 世 (Thuederic II あるいは Thierry II) (在位 595 年-612 年) で、他はオーストラシア王国を継いだテウデベルト 2 世 (Theudebert II) (在位 595 年-612 年) であった。彼らは父の死亡時幼少であったので、彼らの祖母ブルンヒルド (Brunhilda あるいは Brunehault) (543 年生?-613 年没) が摂政になり、政治の実権を掌握した。彼らは相互に仲違いしながらも、協力してネウストリア王国のクロタル 2 世 (Chlothar II) (在位 584 年-613 年) と戦い、ネウストリア王国を侵略した。聖コロンバヌスのリュクイユ修道院 (Luxeuil Abbey) は、テウデリク 2 世の王国内にあった。聖コロンバヌスは、テウデリク 2 世を諭し、非難したが無駄であった。祖母ブルンヒルド (Brunhilda あるいは Brunehault) (543 年生?-613 年没) は、聖コロンバヌスに激怒し、司教と貴族を扇動し、彼の修道院規定に欠点を見つけようとした。聖コロンバヌスはテウデリク 2 世とブルンヒルドなどによってブルガンディー王国を追い出された。彼は、ロワールにて、ナント (Nantes) に進み、ネウストリアのクロタル 2 世の宮廷ならびにオーストラシア王国のテウデベルト 2 世の宮廷に行き、宣教活動を行った。聖コロンバヌスは、テウデベルト 2 世がテ

量のパンが提供された。

3.2 アイオナの伝統とローマ伝統のキリスト教の和解：ウィットビーの宗教会議

664年のウィットビーの宗教会議 (Synod of Whitby) において、アイオナ島の修道院の習慣を受け継ぐキリスト教がローマの伝統を受け継ぐキリスト教との間で和解が成立した。ノーザンブリア王国の王オズウィ (Oswiu) (在位 642年-670年) がローマ方式で復活祭を計算すること、および、修道士の剃髪を順守することを規定した。

7世紀の大ブリテンのキリスト教は、2つの礼拝方式の伝統によって特徴付けられた。アイオナの風習は、アイオナ島の修道院に住んでいたアイルランド修道士のものであった。ローマの伝統では、ローマの慣習によって儀式を保っていた。ノーザンブリア王国では、その2つの伝統が共存していた。そしてそれぞれは異なった王室によって助長された。ノーザンブリア王国のエドウィン (Edwin) (586年生?-632年あるいは633年没) は、ローマから教皇グレゴリウス1世によって使われた宣教師の影響下でキリスト教徒に改宗した。彼の死後1年間の政治不安定を経て、オズワルド王がノーザンブリア王国の王になった。彼は、アイオナの修道士からキリスト教の礼拝方式を習った。彼はノーザンブリア王国をキリスト教化するために、アイオナ修道士を励ました。

2つの伝統の主な違いの1つは、復活祭 (イースター) の正確な計算であった。初期キリスト教ではユダヤの過越祭 (Passover) と同時に復活祭を祝福した。過越祭は、ユダヤ暦の最初の太陰月の第14日 (あるいは第15日) に行われた。この日はイエスが十字架に磔の刑にされた日であった。しかしながら、ローマでは復活祭が日曜日に行われるようになった。そして、第1回ニケアの宗教会議 (325年) において、復活祭を全ての教会で特定の定まった日 (日曜日) に行うことを決めた。すなわち復活祭を同じ日曜日に行う日を決めた。よって、この会議の決定によって、全ての教会 (イングランドの教会は入っていなかった) が同じ日に復活祭を祝うことになった。各教会で異なった日に復活祭を祝うことはできなくなった。しかし、その計算には共通性がなかった。教会毎に復活祭の日付が異なる傾向にあった。一方、660年までアイオナ支持者は、その時点ではローマ人 (聖職者) によって誤りと見なされていた計算表⁶² を使用していた。このアイオナ表では、復活祭が毎年異なった日になるばかりでなく、それではニサン (Nisan) の第14日が日曜日であったら、その日に復活を祝うこと

ウデリク2世に敗北し、アウストラシア王国がテウデリク2世に渡ると、アルプスを越えて、イタリアに逃れた。彼はランバルド王に歓迎された。ミラノとジェノバの間に位置するボッピーオ (Bobbio) で聖ペテロの半壊した教会を与えられ、そこに修道院を建てて定住し、そこで615年に没した。

⁶² アイオナ修道士達は、3世紀にローマで用いられていた古い復活祭の日付方法を用いていた。例えば、ローマのヒポリタス (Hippolytus of Rome) (170年-235年) の8年循環の表、あるいは、ガリア (Toulon)

が許された。しかし、その場合、ローマ方式では、復活の祝福を翌週の日曜日に行っていた。このようなアイオナ表は、イングランドおよびアイルランドの教会でも排除された。ローマ方式にイングランドおよびアイルランドの教会は従うようになった。

イングランドおよびアイルランドの教会で復活祭の日を統一するようになった背景を説明しよう。ノーザンブリア王国のベルニシア女王のエアンフレッド (Eanfled) と彼女の王宮はローマ方式で復活祭を祝い、一方、ノーザンブリア王国のオズウィ王はアイオナ方式で復活祭を祝っていた。同じ王宮内で、ある派が復活 (復活祭) を祝している日に、他の派がレント (Lent) の間にあった。王宮内での宗教行事がちぐはぐになっていた。これを統一する動きが生じた。それでも、司教区リンディスファーンの聖エイダグンが活着している間には、同じ王宮内で異なった日に復活を祝うことは表だった問題にならなかったが、聖エイダグンの死後、彼の後継者フィナン (Finan) (661 年没) がローマで修練したとき、ローマ方式の復活祭日をアイルランド教会で実現させようとしていたアイルランドの修行僧 Ronan によって、彼が支持していたアイオナ方式は攻撃された。フィナンの後継者であった、リンディスファーンの聖ゴルマン (Colmán) (在位 661 年-664 年) (605 年生?-675 年没) の代において、その両者の衝突の解決には王宮 (国王) の采配と決断を必要とした。そのためにウィットビーの宗教会議が開催された。

オズウィ王の息子で、かつ、デイラ王国の王であったアルフリス (Alchfrith あるいはエルフリス (Ealhfrith)) (生没不明) がその宗教会議の開催をもたらす騒動の主要な原因であった。660 年代の初めに、このオズウィの息子は、Ripon 修道院からアイオナの修道士を追い出し、それをローマから戻ってきたノーザンブリアのヨーク大司教ウィルフリッド (Wilfrid) (在位 633 年生?-709 年没?) に与えた。このとき、アイオナの立場は、リンディスファーンの司教であった聖ゴルマンによって推し進められた。ローマ教会の立場を支持していたエ

の司教オーガスタリス (Augustalis) (5 世紀の中旬に活動) によってローマに持ち込まれた 84 年循環表がそれであった。

それに代わって、アレクサンドリア暦をユリウス暦に変換する方法がスキタイ人のディオニシウス・エクシガス (Dionysius Exiguus) (470 年生?-544 年没) によって考案され、525 年に復活祭の日付表が発行された。彼は、19 年循環の表 (277 年頃にシリアのアナトリアス司教によって最初提案され、390 年頃にテオフィリアス司教および 444 年頃にキリルの司教区で作成されたものであった) を彼によってローマのユリウス暦に変換された。その表がアレクサンドリアでもローマでも使用され、同じキリスト教徒が同じ日に復活祭を祝うことが可能になった。彼は、生涯キリスト教徒で、スキタイ人で、500 年頃からローマに居住した聖書学者であった。彼の功績の第 1 は、A. D (Anno Domini) 時代を考案したことであった。第 2 の功績は、復活表の考案であった。彼は、教皇ジョセフ 1 世の要請に応じて、525 年に将来 (95 年後まで) の復活祭の日程を整え、彼自身の考案でその計算を行った。彼の復活祭の日付表は、ローマで即受け入れられ、そのローマとアレクサンドリアにおける復活祭の祝日に関する論争は終焉した。両地では同じ日に復活祭を祝い、ニケアの宗教会議の取り決め事項が実現した。

アンフレッドは、彼女の礼拝堂牧師であったロマヌス (Romanus) を使わし、ローマの立場での復活祭の実現を推し進めた。また、この立場はフランク人の司教であったアシルバート (Agilbert あるいは Æthelberhth)⁶³ (在位 650 年-660 年) によっても採られ支持された。オズウィ王は、その宗教会議を司会し、最終的な判断をした。

この宗教会議の決定は、ノーザンブリア王国ではローマ方式をその規範にし、その教会をローマ文化の流れに持ち込んだ。ノーザンブリアの監督教会の座は、リンディスファーンからヨークに移動した。ウィルフリッドがヨークの司教になり、聖ゴルマンとその支持者は、その立場を変えずに、アイオナ修道院に撤退した。また、聖ゴルマンは聖アイダーンの遺品 (遺骨) をアイオナに持ち帰ることを許された。オズウィ王は、ローマ復活祭を守ってきたアイルランド南部の聖職者を新しいノーザンブリアの聖職者に就けた⁶⁴。

その会議の歴史的意義について触れておこう。その会議は、復活祭をローマ方式に変え、あるいはリンディスファーンの司教区に責任を持つ一部の教会に関していた。また、ウィルフリッドによる復活祭のローマ方式の提唱は、アイオナ支持者に対して勝利した者の強制となった。これよりも重要なことは、第1に、イングランドの教会のローマ化であり、第2には、このローマ化はこの宗教会議を開くことなしに勧められたと思われるが、ゲール教会のローマ教会に対する抵抗としての宗教会議であった。第3は、イングランド教会のローマ教会への従属であった。

むすびにかえて

本稿では、北部アイルランドとスコットランド北西部で活動したダル・リアダ王国の伝説上の始まりと発展、その最盛期・凋落・衰退、そして滅亡について考察した。その王国は、6世紀に始まり、アイダーン王の周辺国との戦いとその勝利でその領土を発展・拡充し、6世紀末にその最盛期に至った。しかし、603年頃の Degsastan の戦いにおいて、その王はノーザンブリア王国のアシルフリス王に敗れ、その後、彼の勢力は衰え、同時にダル・リアダ王

⁶³ 彼は、西サクソン王国の2番目の司教であった。彼の名前 (Æthelberhth あるいは Agilbert) からすると、彼は、ケント王国と親しい人物であったと思われる。彼は、フランク王国によって司教と任命され、その後、ケンウォルフ (ケンウェルフ) (Cenwulf あるいは Cenwealh) (在位 643 年-645 年および 648-674 年) のときに、西サクソン王国に渡った。ケンウォルフ (ケンウェルフ) は、マーシャのペンダ王 (King Penda) (在位不詳; 655 年没) によって一旦追放されたが、ペンダ王の死亡後、再び西サクソン王になった。その王が東アングリヤから戻った後に、西サクソン王国に渡った。

ケンウォルフ (ケンウェルフ) (Cenwulf あるいは Cenwealh) は、東アングリヤ王国に逃亡しているときに、彼は、オズワルド王 (King Oswald) (在位 634 年-642 年) および東アングリヤ王安ナ (King Anna) (在位 636 年-654 年) の勧めによってキリスト教に改宗した。

⁶⁴ 660 年ごろには、アイルランドの聖職者の多くはローマ方式によって復活祭を祝していた。

国の力も衰え、さらに、彼の後継者は、周辺国との戦いに敗北し、ケネル・ガブラーン家とケネル・コンガル家の王家の内部抗争を繰り返して、その勢力は一層衰退した。637年のMag Rath (ダウン州の Moira) の戦い後、北アイルランドのダル・リアダ王国は滅ぼされ、同時に、スコットランドのダル・リアダ王国はその政情を不安定化させ、ノーザンブリア王国に従属し、さらに685年のダンニヘンの戦いにノーザンブリア王国がピクト王国の王ブリィディ (ブルード) 3世敗北し、730年頃に、オエンガス1世のピクト王国の支配下に入り、その王国の大君子権は、ピクト王の支配に入った。

最後に、キリスト教がピクト王国とダル・リアダ王国の融合に大きな影響を与えたことを示した。しかし、アイルランドのアイオナ修道会によってダル・リアダ王国および北ピクト人に弘められたキリスト教と、カンタベリー修道会の影響下で南ピクト人およびノーザンブリア王国に伝えられたキリスト教の対立が顕在化し、最終的には、ノーザンブリア王国からアイルランド修道会は撤退した。それまでは、ダル・リアダ王国は、アイルランド修道会、ピクト王国は、アイオナおよびカンタベリー修道会の影響下にあった。

(くぼた よしひろ マクロ経済学と金融論専攻)